

「生徒の自己肯定感・自己効力感を育てる総合的学習の時間」

兵庫県立湊川高等学校

教諭 横山 木郎

はじめに

本校は、2019年度に設立90周年を迎える夜間定時制(普通科)高校である。「誠実」「協同」「自由」「自治」を綱領に掲げ、倫理観の育成と人権尊重の精神に基づく教育を推進し、共感能力や協調性、善悪の判断力等を育成するとともに、多文化共生社会の実現に向け取り組んでいる。

本校の課題として、生徒の自己肯定感・自己効力感の未成熟、構築の難しさが挙げられる。要因としては、学力面の課題や、他者に対するコミュニケーション能力の不足、経済的理由等が考えられる。

課題に対する本校の取り組みとして「総合的な学習の時間」において、認定NPO法人の協力により導入した、クレッシェンドプログラムを紹介する。

1 取り組みの内容・方法

本校が県内で初めて連携した、認定NPO法人D×Pは、2010年に設立され、2015年にNPO法人に認定された。定時制・通信制の高校生が未来に希望を持つため、「孤立せず人とつながる＝社会資本・自己肯定感」「できた！」と思える経験＝成功体験・自己効力感」を向上させることを目的として活動している団体である。

具体的な活動プログラムとして、「つながり・経験の蓄積:クレッシェンド」「生きる場作り・就職支援:ライブエンジン」「成功体験・居場所作り:いごちかふえ・チャレンジプログラム」を行っている。

本校では「総合的な学習の時間」の自己探求活動として、「クレッシェンド」プログラムを取り入れ、昨年度より実施している。クレッシェンドプログラムは、定時制・通信制高校生と、様々なバックグラウンドをもつ大人(親との関係が良くなかった／人間関係で苦労した・している／不登校だった経験)がコンポーザーとして関わり合い・対話を通じて、人と繋がりを得ることで少しずつ、高校生本人が自己肯定感・効力感をつけていくことを目的としたプログラムである。高校生は様々なオトナの過去と現在の姿を知りながら、自分の過去と未来を考えていく。

①準備

【プログラム実施約2ヶ月前】

実施学年状況連絡会を学年担任団とNPO法人スタッフとの間で行う。

内容はクラスの生徒数、出席者数、男女比、生徒同士の関係、雰囲気、特に注意すべき生徒の情報等、写真撮影について、実施教室のことなど多岐にわたる。

NPO法人とは、「個人情報保持契約書」を締結しており、生徒個人情報漏洩の禁止、生徒との個人的な連絡は取らない契約となっている。

【実施約1ヶ月前】

NPO法人によって、本校でのプログラムに参加する登録コンポーザーが確定される。

コンポーザーとは、年齢が20歳～45歳までの社会人や大学生で、このプログラムで高校生と継続的に関わり、関係性を築く役割をもつ大人のメンバーである。プログラム実施の際は、生徒3～4名あたりコンポーザーを1人配している。コンポーザーはプログラム内で生徒との「信頼」「つながり」を大切に積み上げるため、4回のプログラムすべてに継続して参加できることや、研修等への参加

が必要である。完全なボランティアであり、現在 200 名の登録がある。

コンポーザーの年齢が 20 歳以上である理由は、大学生活や仕事のことを話すにあたり、ある程度の経験を積んでいることが必要であるためである。また上限を 45 歳としている理由は、それ以上の年齢になると、生徒にとって保護者の年齢と近くなり、対話の相手として心理的なハードルが高まる可能性があるためである。生徒と年齢に近いほうが、共通の話題を持ちやすく対話がしやすくなるという利点もある。

NPO 法人は『ひとまとまり』でなく、『一人ひとり』と向き合う「否定せず、関わる」「様々な年齢やバックグラウンドの人から学ぶ」を基本姿勢としている。コンポーザーとしてボランティア登録に至る条件として、NPO 法人が掲げる高校生への基本姿勢をもつことができるかどうかを重視して選考して頂いている。実際に、本校で活動するコンポーザーの方々からは、「過去に辛かった経験があり、同じようにしんどさを抱えている高校生に寄り添いたい」という、本校生徒/思春期にある高校生に対し応援する熱い思いを感じる。

② クレッシュェンドプログラムの実施

参加コンポーザーの確定後、生徒情報をもとに授業の細かな内容が検討される。各授業は、毎回以下のような、授業展開の意図・目的(テーマ)を持って実施される。また、各授業のテーマは決まっているが、『ひとまとまり』でなく、『一人ひとり』と向き合うため、クラス、グループの状況をみてテーマへの最適なアプローチ方法がクラス・グループごとに決められている。(表1.クレッシュェンドプログラム実施計画)

【プログラム序盤】

<第1回授業>コンポーザーや NPO スタッフとの壁をとる授業。

クレッシュェンド授業の雰囲気や初対面の生徒達に感じてもらう。まずは大人側が自己開示し、お互いの性格や雰囲気を知ることを通じて、つながりをつくることを目的としている。

<第2回授業>大人に対する壁をとる授業。

コンポーザーの様々な経験(過去の辛かった・嫌だった経験談)を聞くことを通して、いろいろな生き方を知り、視野を広げる。お互いに少しずつ距離を縮めながら、生徒が自分のことを話してもいいと思えるきっかけ、つながりをつくる。

【プログラム中盤】

<第3回授業>生徒が経験談を話し、今後自分はどうぞしていきたいのかを考える授業。

同級生の話から相手を知り、お互いの経験や考えを共有することを通じて、人とつながる雰囲気をクラス全体につくる。無理に話をさせず、雑談や自分史づくり、ゲームを通して自分のことを少しずつ話しやすくする状況を作る。



【プログラム終盤】

<第4回授業>生徒が「ユメ」を開示し、それを認められる経験をする授業。

自分のこれからのことを考え、話す。自分の想いを言葉にし、それを否定されずに周りに受け止めてもらう。「否定しない」という姿勢を共通認識としてもち、話すことが恐くない話しやすい空間を目指す。未来と一緒に考えることを通じて人とのつながりをつくる。

表1. クレッシュェンドプログラム実施計画

	テーマ	2年1組実施ワーク	2年2組実施ワーク
第1回プログラム	初めまして、こんにちは	マトリクス自己紹介 カブラ	マトリクス自己紹介 カブラ
第2回プログラム	人生色々あるんです	シゴトはっけんカルタ 現在の自分(コンポーザー)	現在の自分(コンポーザー) すごろくトーク
第3回プログラム	これまでとこれから	サイコロトーク 自分史(生徒)	自分史(生徒) 価値観カード
第4回プログラム	みんなでユメブレ	ジョハリの窓 ユメお絵かき・ユメブレスト	マトリクス未来史

2 取り組みの成果

授業後に毎回生徒アンケートを実施し、その結果を次回の授業に反映するとともに、グラフにより可視化し、特徴的な反応を示した生徒の所見と合わせて学校に報告される。

【単年度比較からの成果】

次の図(図1.2 学年クレッシュェンドプログラム第1回・第4回授業アンケート比較)は今年度、2学年(在籍40名)に対して行われた授業後のアンケートの第1回目と第4回目の比較である。どの質問においても、4回目のほうが肯定的な回答が増えており、授業への満足度や期待感が見られる。自己肯定感や自己効力感、コミュニケーションに対する意欲の向上、人とつながることへの前向きな姿勢が見られる。

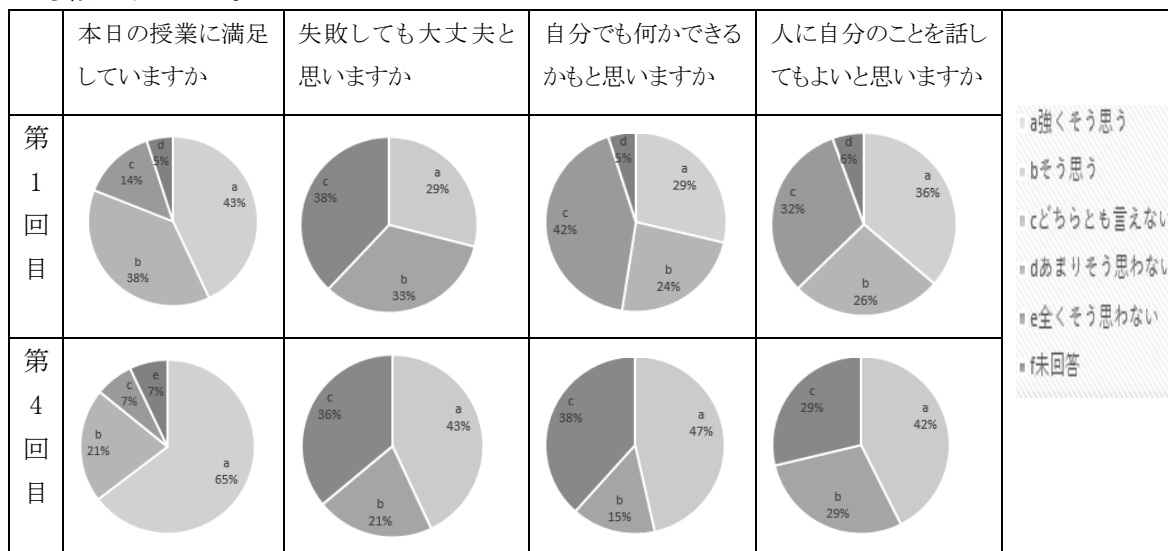


図1.2 学年クレッシュェンドプログラム第1回・第4回授業アンケート比較

【複数年度比較からの成果】

次の図(図2.クレッシュェンドアンケート1年時、2年時比較表)は、昨年度(1年時)のプログラム受講アンケートとの比較である。本校2学年は、昨年度(1学年の時)、初めてこのプログラムを受講し、本年度は2年目となる。2学年にとって、昨年度のプログラム受講は、初めて出会った関係性のない大人(コンポーザー)からの積極的なアプローチに対して、生徒各自がつながり方、関係性の築

き方を思索する場、経験する場・生徒側からのアプローチを肯定してもらえる経験をする場となった。2 学年にとって今年度は各生徒一人一人が昨年度の経験を成熟させ各自のスキルをもって、NPO 法人のスタッフやコンポーザーの存在、プログラム内容を理解した上での受講となった。

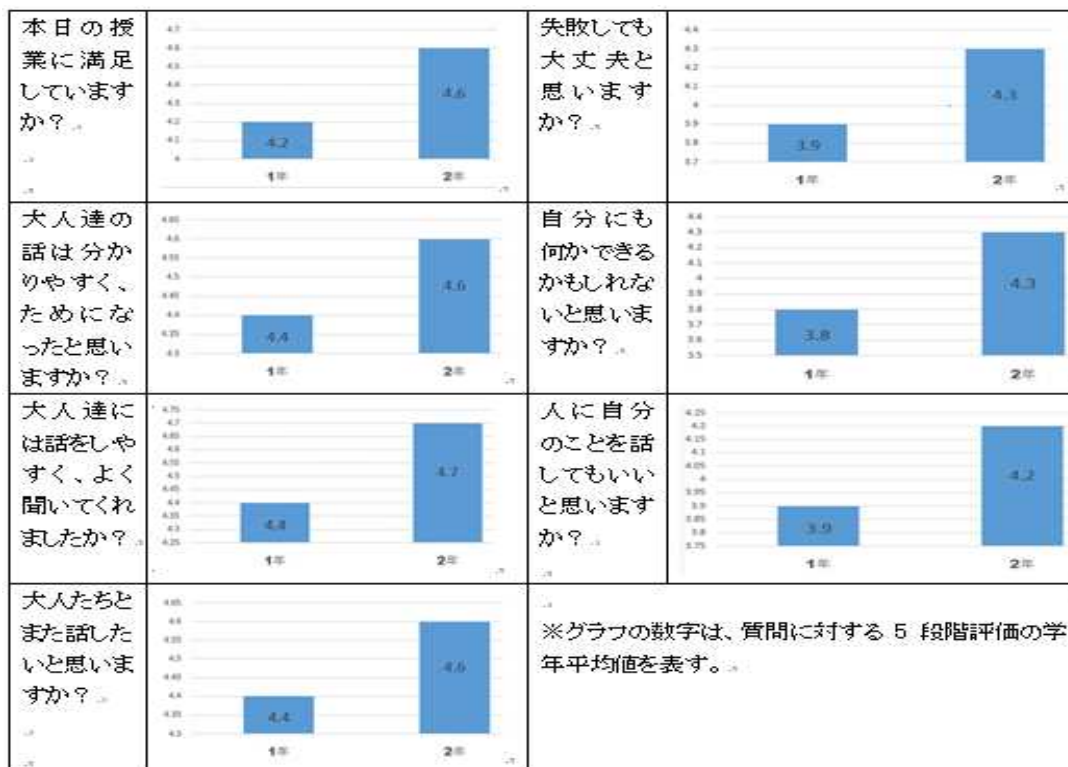


図2. クレッシュェンドアンケート 1 年時、2 年時比較表

各アンケート項目において1学年時と本年度(2 学年時)では、2 学年時での実施結果が、ポイントが上がっている。コンポーザーやスタッフと関係性・信頼感が構築されると共に、本人自身がこのプログラムを通じて受け入れられ、認められた経験を積んだことによって、自己肯定感や自己効力感が強化され、自己の発信力が伸びた結果であると考えられる。

【学校教育活動としての成果】

社会に開かれた教育活動として、外部機関であるNPO法人と連携しながら、本校の課題である生徒の自己肯定感・自己効力感の成熟、構築に取り組むことができた点も成果の一つである。

3 課題及び今後の取り組みの方向

昨年度の第 2 回授業のコンポーザーの経験談によって、生徒自身の辛い体験を想起させたことがあった。そのような場合の対処法を、事前に生徒に周知させておく必要があることが分かり、以後打ち合わせの中では注意を払ってきた。また、このプログラムは、2・3 学期を中心に行うため、第 3 学年・4 学年の進路を各生徒が考える 1 学期に、第 3 学年や 4 学年の自己発信力や自己肯定感をサポートする体制がとれるしくみが必要もある。

今後の取り組みの方向性として、NPO 法人と協議を一層重ね、生徒の自己肯定感・自己効力感の成熟、構築が各学年の生徒に育つよう、さらに良いプログラムするために実施方法を検討し、この取り組みを継続し、生徒の「自己肯定感・自己効力感」の向上に繋げたい。